



Title	言語発展の原理-国際共通語エスペ란トの観点から-
Author(s)	水野, 義明
Citation	明治大学教養論集, 247: 1-21
URL	http://hdl.handle.net/10291/10097
Rights	
Issue Date	1992-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

言語発展の原理

——国際共通語エスペ란トの観点から——

水 野 義 明

英語は「共通語」か—「序」に代えて

『英語支配』とコミュニケーションの平等』と題するパネル・ディスカッションが開催された。1990年6月30日午後、日本コミュニケーション学会 The Communication Association of Japan の第20回記念年次大会の二日目、場所は明治大学和泉校舎 AV 棟ホール。名古屋大学津田幸男氏が司会、講師は成城大学中村敬氏、摂南大学中山行弘氏と明治大学の水野。津田氏は「異文化コミュニケーション論」の専攻で、英語に関する著書が多いが、最近では「英語支配の構造」を刊行して話題を呼んだ。中村氏の専攻は「英語社会学」、英語関係の著書のはかに英語教科書の著作者代表でもある。中山氏はハワイの東西センター文化研究所で「国際コミュニケーションのための言語学」を研究、津田氏と同様の分野で関連論文が多い。水野は英語学の専攻であるが、国際交流分野での共通言語手段という問題に関心を抱いている。

さて、パネル・ディスカッションのテーマは、全世界的「英語支配」の現状に対して、「平等な『交流の権利』」を確立するための具体的方策の検討であった。

まず、中村氏が「母語主義のコミュニケーション」を提唱した。いろいろな民族に属する人々がそれぞれ固有の言語を使って互いに交流ができるのが、国際交流の理想である。しかし、現在のところそういうことはにわかには実現できない。そこで、少なくとも自分の国の中では、外国人に対しても「母語主義」

を貫徹するべきである。そういう認識を前提としてはじめて国際的相互理解の機運も生じる。実際の交流にあたっては、「翻訳機」などのハイテクの成果の応用もじゅうぶん期待できる。

中山氏は、「国際英語」を支持する。好むと好まざるとにかかわらず「英語支配」の大勢は否定できない。重要なのは、この現実即して、「交流の平等」のための実現可能な対策を提案することである。それには、英米人の固有の言語としての「英語」ではなく、いわば「世界共通語」としての「国際英語」が妥当である。「国際英語」は、英米人の言語規範には拘束されず、その習得・使用は英米人の思考様式や伝統・文化などへの従属を意味しない。国際的実用のためには文法も語彙も現行の「英語」と必ずしも同じではなく、いわば「脱英語化した」言語手段である。

水野は、「国際共通語」の要件として、「中立」「合理」「容易」を挙げた。この点で英語も含めてすべての民族言語・自然言語は失格であり、「国際共通語」は「人工計画言語」でなければならない。具体的には、現在国際交流で広く実用に供されている唯一の人工言語である 에스ぺ란โต の導入を提案する。

それぞれ異なる立場の三人の講師の議論に聴衆からの発言も加えて、討論は活発に展開した。この種の問題では明確な結論を即座に得るのは困難であるが、「英語支配」の現状について問題を提起し、識者の関心を喚起した点で、大いに有意義であったと思う。

それにつけても、「国際化の時代」にあって、ある意味では最も緊急の課題であるべき「共通言語手段」について、識者の間にコンセンサスが得られていない現状は、率直に言って不可思議である。交易・運輸・通信などの物質的分野や情報交換などの知的分野では、最先端の科学技術の応用によって「国際化」は日進月歩の勢いで進展しているのに、交流に不可欠の言語という面では、旧態依然たる「通訳・翻訳」方式がはばをきかせている。時間と労力の莫大な浪

費である。異言語間交流の維持のために費やされる巨額の投資の何十分の一でも「共通言語手段」の開発に振り向けたら、事態は根本的解決に向かって大きく一歩踏み出すことになるであろう。発想の転換が必要である。

「国際共通語」エスペラントに関して、私はこれまでこの「明治大学教養論集」でも、たびたび見解を述べてきた。それについては、以下の論考を参照して頂きたい。

「国際共通語」の基本問題（第65号，1966年4月）

エスペラントの「国際性」について（第132号，1980年3月）

「エスペラント語源学」の提案（第143号，1981年1月）

エスペラントの位置測定（第150号，1981年12月）

エスペラントの表現力について（第159号，1983年2月）

「第二外国語」論（第166号，1983年12月）

イデオロギーと「国際語」（第166号，1983年12月）

ヨーロッパのエスペラント事情散見（第187号，1986年3月）

エスペラントでコンピュータをなんと言うか？（第244号，1990年3月）

中南米のエスペラント事情について（第234号，1991年3月）

周知のように、エスペラントは1887年にポーランドの眼科医ラザロ・ルドヴィーコ・ザメンホフが公表したものである。誕生以来一世紀余りを経て、エスペラントは言語として定着している。一般に専門の言語学者の間では「人工言語」を軽視する傾向があるが、近年にいたってエスペラントを言語学の対象として検討しようとする本格的研究が現れるようになった。そのひとつに、フランソワ・ロ・ジャコモの「エスペラントの発展においては、権威か自由か」（François LO JACOMO “Liberté ou Autorité dans l'évolution de l'Espéranto” 1981, Edition <Edistudio>, Pisa, Italie）がある。

原著は、著名な機能派言語学者アンドレ・マルティネを指導教官としてパリ

大学第3系（言語学）の学位請求論文として提出された、B5版384ページにわたる大作である。人工計画言語エスペラントを「自然言語」と同格の「ひとつの言語」として取上げ、その発展の具体的な諸相を文献や実地調査に基づいて克明に追求し、「言語の発展には、いかなる『権威』も介入するべきではない」という論旨を展開している。

ジャコモのこの論考は、単に「エスペラント論」にとどまらず、エスペラントを素材にして「言語発展」という問題をも解明しようとする画期的な試みである。「動態論 *dynamique*」の視点から、「誤用 *fautes*」「充実 *enrichissement*」「調整 *réactualisation*」「冗語法 *redondance*」などの新概念を縦横に援用して、言語発展の実相に迫ろうとしている。論述はやや難解だが、論旨は明晰である。

私のこの論稿は、以上のジャコモの労作を紹介・論評し、あわせて「言語」としてのエスペラントについて識者の関心を喚起することを目的とする。紙数の関係上、若干の問題点に限定せざるを得なかった。あらかじめ了承されたい。

1. エスペラントは「言語」である

「国際補助語」の基本問題

「エスペラントは全人類の単一言語を志向する」と考える向きもあるが、これは全くの誤解である。エスペラントが志向するのは「国際補助語」*International Auxiliary Language* であり、各民族固有の言語を否定しているのではない。日本人も中国人もアメリカ人も、それぞれ同国人どうしの間では母国語を使用するのは当然だ。ただ母語が異なる人々の交流には、相互に生得のハンディキャップがない「中立」の言語手段を利用しようということなのだ。

ところが、この明白な原則も、実際にどういう基準で「国際補助語」を作成するかという点になると、いろいろな問題が生じてくる。いわゆる「自然主義」

naturalismo と「図式主義」skemismo, ジャコモによれば「国際語学」Interlingvistiko と「エスペラント語学」Esperantologio の対立ということになる。

両者の相違は、要するに、「自然言語・民族言語」との距離にある。自然派は、国際的使用のためには、補助語は現存の諸言語に（事実上は、西欧の諸言語に）できるだけ近似しているほうがよいと考える。多少の不規則や慣用事項を忍んでも、「言語らしさ」を求めるのだ。これに対して図式派は、全世界的普及という国際補助語の本来の性格を考慮して、記憶の負担を軽減し伝達・受容の効率を高めるためには、発音・書記・文法・造語法のあらゆる分野にわたって、「規則性」を重視する。

エスペラントは、大部分の語根を西欧語から採用しているので、語彙という点では一見すると「自然主義的」であるようだが、その基本的構造には「図式主義」が貫徹している。ジャコモは、人工言語案の歴史について概観しているが、エスペラントの成立以後にも、イード、オクシデンタル、ノヴィアール、インテルリングアなど種々の改良案が提案された。すべて、「人為的な」エスペラントを西欧言語に近づけようとする試みである。ジャコモによれば、補助語の基準は「中立」と「容易」である。「中立」とは「いかなる民族にも特権を与えないこと」であり、「容易」とは「規則の貫徹」である。国際共通語による交流には、特定の民族が主導権を握る「階層性」hiérarchie があるてはならないのだ。

現在、エスペラントを学習し、国際交流に利用している人々の数は、基準の取り方にもよるが、100万から1000万と言われる。世界の全人口に比べればごく少数ではあるが、その分布はほとんど地球の全表面にわたっている。アジアでは、近年とくに中国の台頭が著しい。私は、かつて一年間旧ソ連を含めて東西ヨーロッパを巡歴し、一昨年は中南米諸国、昨年は中国を訪問して、各地のエスペランチストとエスペラントによって交流した。「中立」「容易」という原則に立脚し、真の「国際性」を志向するエスペラントは、もはや有閑知識階層の趣味や道楽ではなく、民族言語と同様に機能する「生きたコトバ」であるこ

とを実感した。その見聞を交えて、以下にジャコモの所説について述べようと思う。

「国際的発音」は存在するか

エスペラントは「国際語」である。言い換えれば、特定の民族語の基盤や「ネイティブ・スピーカー」が存在しない。そこで、問題となるのは、「エスペラントの個々の音声の発音の正否は、どういう基準によって判断したらよいか」ということである。

私はヨーロッパで、lとrの区別につき何度も指摘された。韓国では、fやvがpに、zが/dʒ/になるのをたびたび耳にした。西欧では、c/ts/を/s/や/tʃ/と発音する人が多かった。エスペラントの母音は5個、日本語のア・イ・ウ・エ・オにはほぼ対応するので、母音の発音では日本人がいちばん正確だとされている。いずれにせよ、「国際語」の発音において、話し手の母語の影響が現れてくる。それが、交流の効率を多少なりとも低下させていることは事実である。

エスペラントの音韻組織は、創始者ザメンホフの当初の考えに基づくもので、「簡素で古典的な母音体系と、スラブ語にヒントを得たとされる豊富な子音」を特徴とする。「音韻」は「音声」とは異なるから、実際の発音には種々の「変種」があり得る。たとえば、/t/は無声・閉鎖歯音であるが、現実には韓国人や中国人のようにやや有声化したり破裂をともなったり、またはフランス人のようにやや口蓋化したりする場合もある。したがって、重要なのは個々の音声の「発音」ではなく、各音声（音素）間の相対的關係である。語を構成する音声要素を置換すると、語の指示する意味が別物となることがある。こういう場合に当該の二つの音声要素は、互いに別個の「音素」とされる。（たとえば、tiri「引く」とdiri「言う」ではtとd、glaso「コップ」とgraso「脂肪」ではlとr。）これは、ふつう「最小対立音素」と呼ばれるものである。ジャコモは、この「最小対立」という概念を用いて、エスペラントの各音素を子

細に検討し、「エスペラントには、(最小対立に基づく)『最小対語』が多い」と言う。その典型は、「相関語群表」である。ki-(疑問), ti-(指定), ci-(総称)などの語根部分と、-u(人), -o(物), -e(場所)などの語尾との自由な組合せによって、多数の語彙の産出を可能にする「図式主義」の一例でもある。

いっぽう、一般に言語学の課題でもあるが、たとえば c /ts/は「一個の音素か、二個の音素か」という問題について、ジャコモは詳細に論じている。彼は、けっきょく、単一説、複合説の両者の論拠をそれぞれ挙げて、理論設定については「客観的」よりも「主観的」妥当性を重視するべきだと述べる。「/c/を単一の音素と仮定すると、どんな利点があるか。/c/を二個の音素と仮定すると、どんな利点があるか」という観点である。「言語の記述とは、その言語から抽出された客観的データの下に隠されている真実を探すことではなく、研究の必要のために設定した目的にもっともよく応えるモデルを構築することである」と言う。このような発想は、現代言語学や数学にも見受けられる。後ほど紹介するジャコモの「動態論」は、こういうアイデアをエスペラントを素材とする言語発展の研究に適用したものである。

さて、エスペラントの「標準音」は存在するのか。ジャコモは問題を提起するが、明確な回答を示していない。彼の示唆するところに私の考えを加えてまとめると、次のように言えるのではないか。

「エスペラントには、民族言語でいう意味での『標準音』は存在しない。ただし、各音素は『音韻体系』の中で相互に相対的に位置づけられているから、現実の交流の妨げにはあまりならないだろう。(たとえば、t と d という『最小対立』が認められる限りでは、t と d とが実際にはどのように発音されても、tiri と diri は区別できる。)」

「エスペラントの発音に母語の影響があっても、同国人どうしの間であれば相互理解は可能である。母語を異にする人々がそれぞれ自分の母語ふうのエスペラントを話す場合には、たしかに支障を来すだろう。しかし、交流の目的は『相互理解』であり、そのための努力がなされて、『国際的発音』がおのずから

形成されていくであろう。」

「いっぽう、『エスペラント音声学・音韻論』の研究が進むにつれて、各音素の特質がいっそう精確に規定されるようになるであろう。」

私見によれば、音声面でのエスペラントの「方言化」を抑止している最大の要因は、エスペラントが「国際交流のための言語手段である」という点にある。一地域の発音に偏向したのでは、全地球的規模の交流は不可能となり、エスペラント本来の機能が失われてしまうであろう。現実の交流分野での、エスペランティストたちの意識的・無意識的志向が、エスペラントの「国際的発音」の形成に大いに貢献するのだ。

「語」とは何か

『「語」とは何か』。これは、言語学にとって永遠の課題である。これまでも多数の「定義」が提案されているが、コンセンサスは得られていない。その理由は、学者の言語観や研究方法の違いにもあるが、「語」の規定にあたって素材とする言語の特質に依存するところが大きいと思う。

ところで、自然発生的に形成された民族言語に比べて、エスペラントの特質は上述のような「図式主義」である。エスペラントでは、「語」は原則として「語根」「語尾」「接辞」から成り立っている。これらは、いずれも個別に認知できる要素であり、互いに自由に結合して文中の一単位として機能している。

たとえば、

語根：ir-「(動詞) 行く」、bel-「(形容詞) 美しい」

語尾：-as (現在)、-is (過去)、-e (副詞)

接辞：en-「…の中に・へ」、-et (指小辞)

→iris「行った」、eniras「入る」、belete「きれいに」

このように明確に要素に分析できる「透明な」語構造を有するので、エスペ

ラントを「膠着語」に分類する説が有力である。クロード・ピロンは、中国語と比較して「孤立語」であるとしている (Claude Piron “Esperanto: Ĉu Eŭropa aŭ Azia Lingvo?” 19, 日本語訳「エスペラントの位置測定」名古屋エスペラントセンター, 1977)。

ジャコモによれば、ふつうエスペラントでは文中の各単位は「統語的情報」と「意味的情報」をになっている。たとえば, *mortas*「死ぬ (語根 *mort-* と、現在語尾 *-as*)」の場合, *mort-* は「意味的」、*-as* は「統語的」情報を伝えている。ただし、どちらも単独で発話に現れることはできず、互いに結合してはじめて機能する。したがって、「『語』とは、構文的情報の (発話の中での) 最小単位である」という規定もできることになる。(フランス語の (*je*) *meurs*「私は死ぬ」) では、二つの情報は明確に分離できない。

これとは別に、ジャコモは「発話の受け手」の観点からも、「語」を検討している。(後述を参照。) いずれにせよ、「語」という問題についても、彼の立場は「研究目的に応じて、対象が規定される」ということで、抽象的・普遍的「定義」は不必要なのだ。

一般に「言語」の記述に際しては、「形態論」*morphologie* と「統語論」*syntaxe* とを区別している。しかし、エスペラントの場合、両者がまったく別物であるとするのには、疑問がある。ジャコモは、次のような例を挙げている。

(1) *mi kutimas manĝi en restoracio* 「私はレストランで食事をする習慣がある」

(2) *mi kutime manĝas en restoracio* 「私は習慣的にレストランで食事する。」

これはほとんど同義であり、違いと言えば(1)の *kutim-*「習慣」という語根につく「動詞現在語尾」*-as* の役割を、(2)の *manĝ-*「食べる」という語根に移しただけである。

さて、これは「形態論」と「統語論」のどちらに属する問題なのだろうか。

「エスペラントの統語論 *syntaxe*」という一節で、ジャコモが主として語の構成や語要素の機能について述べているのは偶然ではない。

「アイ・ラヴ・ユー」か、「アイ・ライク・ユー」か

言語の記述には、音韻・形態・構文のほか「語彙 *léxique*」も重要な分野である。

すでにふれたように、エスペラントの語彙を構成する語根や語尾、接辞は、主として西欧語に基づいている。しかし、文明の進展と社会情勢全般の変化にともなって、新しい事物を表すのに「新語」の導入が不可欠となってくる。

エスペラントも「生きたコトバ」として、時代に適応して語彙の面でも改新を取り入れる必要があるのは当然である。創始者ザメンホフが制定して以来金科玉条とされている「エスペラントの基礎 *Fundamento de Esperanto*」のエスペラント文法第15条には、以下のように書かれている。

『『外来』語、つまり多くの民族言語が同一の源泉から借用している語は、エスペラントでは変化しない。それらの語は、ただエスペラントの正書法と文法語尾をとるだけである。しかし、或る部類において、いくつかの語が同じ語根に由来しているときは、改変を加えることなしに基本的な語のみを用い、その他の語はエスペラントの規則に従って作るほうがよい。たとえば、『悲劇 *tragédie*』は *tragedio*、『悲劇的 *tragique*』は *tragedia* というようにするのだ』。

こうして、「ラジオ *radio*」「テレビ *televido*」「自動車 *aŭtomobilo*」「自転車 *biciklo*」などの語が導入された。「コンピューター」については、*komputilo*（*-il* は「道具・手段」を表す接尾辞）が多く使われているが、*komputoro* も見受けられる。

「国際的に」使用されている語彙とは異なり、日常語では話し手の母語の影響が著しい場合もある。たとえば、「好む」という意味の動詞では、対象が「人」か「物」かによって、英語は *love* と *like* の区別をする。フランス語では、一般に *aimer* を使う。エスペラントでは、こういう場合に *ami* と *sati* を使いわ

ける人々もいる。妥協策として plaĉi 「…の気に入る。(英語 to please)」も考えられるが, al mi plaĉas ĉokolado 「私にはチョコレートが気に入る」となると、構文が複雑だ。ジャコモは、『『好む』の意味では ami を使い, ŝati は『評価する』の意味に限ってはどうか』と言っている。「口あたりがいいから菓を『好む ami』と「効き目があるから菓を『好む ŝati』, 「親切で楽しいから教師を『好む ami』と「有能だから教師を『好む ŝati』」というように区別するのである。

英米人にとっては、「ベッド」「ペン」「犬」は *bedo, *peno, *dogo のほうが都合がよいが、実際は仏・独語由来の lito, plumo, hundo が使われている。birdo 「鳥」, kato 「猫」, fiŝo 「魚」などは、この逆の例である。個々の単語でこの種の事例は数が多い。つまり、日常用語で「国際的語彙や語法」を求めようとしても無駄なのだ。

この問題について、けっきょく私は次のように考える。

1. 当初ザメンホフが制定した「基礎語彙」を遵守する。(みだりにこれに手を加えると、エスペラントが混乱し、言語としての実用に耐えなくなる。)
2. 「基礎語彙」の範囲内でも生じる「母語」の影響については、「国際的発音」の形成と同様の過程を経て、「国際的語法」が形成されることを期待する。
3. 「新語」については、上述の「エスペラントの基礎」にある原則を適用する。

ジャコモは、エスペラントの語彙について、「自然派」の言う意味での「国際的(西欧語的)語彙」に固執する必要はないと述べる。また、エスペラントの語要素の「語源」は、重要ではないと言う。「語源」を知らなくても実用に支障はないという理由である。これについて私は必ずしも賛同しないが(冒頭

に挙げた拙論『エスペラント語源学』の提案を参照)、詳細は別の機会に譲ることにした。

2. 言語の発展

「充実」と「発展」

ジャコモは、「言語には『発展』*évolution*がある」と考えている。この語は、「進化」と訳してもよい。言語に時代的変遷があることは誰しも否定できないが、それを単なる「変化」ではなく、一種の価値判断を加味して肯定的に認めるのである。

一般に、どんな言語でも、音韻・形態・統語・語彙の各分野にわたって、「複雑」から「単純」へ、「曖昧」から「明確」へと推移していく傾向がある。これは、現代的文脈では、「情報伝達」の効率化という意味で、確かに「発展」と呼ぶことができる。

ジャコモが言うように、エスペラントが民族言語と同様に機能する「言語」であるとするならず、エスペラントにも当然「発展」という現象が見られるはずである。では、その「発展」は、具体的にはどのような過程によって実現されるのであろうか。

ジャコモによれば、「発展」の最大の要因は「充実」*enrichissement*である。「充実」とは、一定時点における言語の共時的状態 *synchronie* に対する「新要素の介入」である。これは、最も広い意味をもつ概念で、意識の導入や改革の試みのみならず、無意識の言語行為の結果生じる現象や文法的・語彙的「誤用」をも含んでいる。「発展」が長期にわたる「目に見えない」継続的変化の過程であるのに対し、「充実」は各時点での「突発的」現象であり、いわば「発展」の「可視的」部分である。

「充実」の顕著な事例は、新語導入である。ジャコモは、次のような場合を

取り上げている。たとえば、エスペラントでは、「上る」は（「図式的」方法によって）supreniri となる。supra（形容詞「上方の」）を副詞形 supre にし、それにさらに「運動の方向」を示す対格語尾 -n をつけて supren「上方へ」を作り、動詞 iri「行く」と組み合わせたものである。したがって、「下る」は「反義」の接頭辞 mal- をつけて malsupren となり、malsupreniri という語が得られるのである。こういう「図式主義」の煩雑を嫌って、フランス語由来の ascendi「上る」、descendi「下る」が使われはじめて、今では辞書にも採録されている。

ジャコモは、これに対し alsupri「上る」や desupri「下る」はどうかと言う。（al は前置詞「…へ」、de は同じく「…から」、supro は「上方」、-i は不定詞語尾。）

supr- という語根は、ふつう動詞語尾とともに使われないのであるが、上記の「新語」は、各要素の意味が明確であり、また文脈からも類推がきくので、理解可能である。この言い方が習慣となれば、supri「上にいる」という用法もひとりでにできてくる。ジャコモによれば、こういう「充実」が実際の運用過程で取捨選択（「調整」）されて、最終的には「発展」となる。

このほか、ジャコモは、「充実」の一種である「誤用」fautes も「発展」の要因として重視している。たとえば、エスペラントの kara はフランス語 cher「親愛な」「高価な」に対応し、辞書にもこの両方の意義が採録してあるが、実際の用例ではもっぱら「親愛な」という意味で使われている。また、「未来」という意味で estonto を使う場合、本来の用法に違反することになる。（esti「…である（英語 be 動詞に相当）」、-ont「能動未来分詞」、-o「名詞語尾」。）なぜなら、ザメンホフの考えでは「分詞はふつう『人』を表す」からである。「未来」という意味では、「抽象」の語尾 -ec をつけて estonteco としなければならない。kara を「高価な」、estonto を「未来」という意味で使うのは明らかに「誤用」であるが、同時にそれは意味的な「充実」であり、将来の

「発展」の契機になるとされている。

「充実」は「発展」の源泉、「発展」は「充実」の結果である。両者は別物ではなく、言語の「動態相」*dynamique* の二つの側面に過ぎない。「充実」は言語体系に及ぼされる外的原因の所産であり、その外的原因とは「交流の必要」である。言語発展に関するジャコモの観点は、「言語」*langue* よりも「言語活動」*langage* を重視する。「規範」や「権威」に基づく「階層的交流」は「発展」の障害となる。言語的現実をまず優先させなければならない。「国際共通語」を志向するエスペラントの場合、とくにそういう姿勢が必要である。エスペラントの拠り所とされているザメンホフの著作について、ジャコモはそれを「金科玉条」とするのを戒めている。

「動態論」的研究方法

ジャコモは、名詞の性区別、相関語表、時制と相（ATA/ITA 論争）などエスペラントの具体的問題について詳細に論じているが、彼にとって最大の関心事は「研究目的」の設定とそれに相応する「研究方法」の確立である。たとえば、「対格」（エスペラントでは、語尾 -n で表す）については、四つの観点がある。

第一は、「国際語学的」研究方法である。それによれば、英・仏・西など西欧諸語には対格は存在しないのだから、エスペラントでも対格は無用の長物ということになる。（「自然主義派」のいうような）「国際性」を志向しているからである。

次は、「規範的」研究方法である。これは、簡単に言えば、権威をもって規範を規定しようとする。人工言語の「安定」と「統一」を重視するものであるが、言語としてのエスペラントの発展を阻害する傾向が指摘される。

第三は、「記述的」研究方法である。対格に関しても、まず現実の用法を観察し、それに基づいてもっとも適切な理論を作り出そうとする。たとえば、エ

スペラントでは副詞にも対格語尾をつける用法が存在するので、対格は「屈折」か「派生」かという問題が生じる。アプリアリな規範を排除し、事実を「経済的に」説明することを目的としているのである。

最後に、ジャコモが主張する「動態論的」*dynamique* 研究方法がある。記述的研究方法と同様に、言語的現実を重要視するのだが、「動的」観点を導入しているのが特徴である。言語は固定した「体系」ではなく、また単に「変化」するだけでなく、一定の方向に沿って「発展」していくとされる。(ジャコモは、別のところで、「予見言語学」という概念を提唱している。)

この「発展」の直接の要因は、上述のように「充実」である。「充実」は、具体的には「誤用」という形をとって現れることもある。ジャコモは、自分が実施した「アンケート」調査の結果に基づいて、「誤用」の実態とその由来を検討している。しかし、それにもまして強調されているのは、言語発展における「冗語法」*redondance* の役割である。

「冗語法」の三原則

「流動」に主眼を置くジャコモの「動態論」にとって、「冗語法」は、「体系」を基礎とする「共時論」*synchronie* における「離散単位」*unités discrètes* と同様に、重要な観念である。ジャコモは、「冗語法」の原則について以下のように述べている。

〔冗語法の第一原則—総体化の原則〕

「発話 *énoncé* には、冗長な要素は存在しない」。

「冗語法とは、発話のいかなる点にも焦点を合わすことができない総体的な特性である」。

ジャコモによれば、「発話」は「全体として」冗長なのであり、発話のどの

部分がどの部分に対して冗長なのかは決めることができない。情報の単位というものは存在せず、発話の連鎖の各点が多くの情報にない、また各情報は各点に散在しているからである。

〔冗語法の第二原則—均衡の原則〕

「冗語法の最適率は、情報解読のための受け手の努力と、メッセージ産出のための話し手の努力との均衡点によって決められる。つまり、この二つの努力の総和が最小になるような点である。より多くの冗語法を産出するには、話し手の側で一層の努力が必要であり、逆に冗語法の度合いがより少ない発話を解読するには、受け手は一層の努力を必要とする」。

この第二原則は、第一原則を数量的に規定したものである。過度の冗長や過度の簡潔はいずれも交流の障害となる。一般に冗語法は、書き言葉よりも話し言葉に多く見られる。ジャコモは、ここで「言語フィルター」という観念を取り入れる。これは、情報を構成する諸要素のおおのにおに、主題に関係のある「関連性」を配分する機能のことを指す。

たとえば、難解な数学の授業で、教授が同じ事柄を十回繰り返して言っても、学生の「言語フィルター」が教授の「言語フィルター」と同じような「関連性」の配分を行わなければ、情報はじゅうぶん理解されない。逆に、学生が冗語法の限度いっぱいにくどくどと答案を書いても、「関連性」の配分がずれている場合は、必要な情報が教授に伝わらないのである。

〔冗語法の第三原則—経済の原則〕

「受け手は、発話のいろいろな点への関連性の配分を、経済の原則にしたがって行う。すなわち、最小限の注意努力で最大限の情報を得ようとするのだ。最小限以上の努力をすれば、発話を単に理解するのに必要な

ものよりも多くの情報を得るであろう。そして、彼は、この余分な情報を使って、話し手を特定し、教えこまれたり自分で作りあげた規範や誤用の観念との関係において、どのように話したらよいかを位置づけるのである」。

言語発展における「経済の原則」は、ジャコモの指導教授であるアンドレ・マルティネが提唱し、一般に受容されている。ただし、アンドレ・マルティネが「言語体系」という観点から「経済」を取り上げているのに対し、ジャコモは「交流の各時点」という観点から考える。言い換えれば、「冗語法と『経済』との関連」である。動態論の研究目的は、「一定の時点で、冗語法と経済とが、巨視的には発展として認められる事象を、どのようにして生じさせているか」を知ることとしているのである。

「冗語法」と「発展」

「冗語法」は単に「余分なもの」ではない。種々の悪条件の下でも交流を可能にするという積極的役割を果たしている。ジャコモは、以下のような見解を引用している。

「メッセージ（現実の発話）は、交流に必要以上に多くの情報を伝える。この余剰な情報が冗語法の尺度となる。（…）言語における冗語法は、（広い意味での）「騒音」による交流のマイナスを補っているから、不可欠である」。

しかし、ジャコモの言う「冗語法」は、それ以上の意味をもっている。「冗語法は、言語の経済を機能させ、したがって…言語を機能させている。冗語法なしには、体系は必然的に凝固し、言語習得過程の説明は不可能となる。…」

つまり、冗語法は交流を「補足する」副次的要因ではなく、言語発展の主要な要因として捉えられているのである。

一般に言語学者は、まず「体系」が存在し、その「体系」は個々の「単位」から成り立っていると考えがちである。しかし、ジャコモは「冗語法は単位以

前に存在し、言語体系は冗語法から生まれる」と主張する。たとえば、言語獲得の最初には、子供は何も情報を伝えていない多数の音声を聞くだけである。この場合、「冗語法」は無量大だ。しかし、子供は、その後しだいにこれらの音声を選別して、それから情報を引き出し、こうして冗語法を減少させていき、最終的には上述のような冗語法の「最適率」に達する。「最適率」を越えて進もうとしても、交流が成立しなくなるから、子供はそこでとどまることになる。言い換えれば、こういう共時的状態がいわゆる「言語体系」に相当するというわけである。「ラング」よりも「ランゲージュ」を、「コンペタンス」よりも「パフォーマンス」を重視する「機能言語学派」の観点である。

ちなみに、言語にとって基本的概念である「単位」について、ジャコモは「冗語法」を媒介として独自の規定をしている。それは、「単位とは『間隔』である」ということだ。

ふつうの「発話」は多少なりとも「冗語法」（必要十分な情報以外の余剰要素）を含む直線的・連続的過程である。われわれの「言語フィルター」は、一連の音声連鎖の中から必要な情報を選別して把握する。その際、新しい「情報」が伝達され始める瞬間に、そのつど注意と緊張がピークに達する。その後は、（新情報を期待していない間は、）注意は弛緩する。「単位」とは、いわばこの注意休止中の「時間間隔」とされるのだ。

「自由」か、「権威」か—「結び」に代えて

「予見言語学」

ジャコモは、エスペラントを民族言語と同じく発展中の生きた言語として研究の対象としている。しかし、現在のところ「正統的な」言語学はエスペラントをじゅうぶん認知しているは言えない。創始者ザメンホフは、「言語学者に助言を仰ぐな」と言ったと伝えられる。そもそも人工語エスペラントに関して、言語学者はどのような役割を果たすことができるのだろうか。

ここで、ジャコモは、「予見言語学」*linguistique prévisionnelle* を提唱する。「役に立つ言語学的研究は、『記述的』のみならず『予見的』でなければならない」。たとえば、新語の導入についても、その新語が「発展」の方向に則しているか否かを考慮し、現在のエスペラントの言語体系の中で将来どんな位置を占めるかを予見し、それに基づいて適切な助言をするのである。

「予見言語学」のエスペラント研究は、ジャコモによれば、以下のように行われる。

- (1) (インフォーマントを使わずに行う)「冗語法」の理論的研究。音声・統語・意味の各分野にわたって、入替えなどの操作を故意に行い、メッセージの冗語法を人為的に減少させる。
- (2) インフォーマントについて、上述の操作を適用し、理解可能な冗語法の「限界」を探究する。
- (3) この「限界」の前後で、(国籍、階層など)インフォーマントの言語指標値との相関関係を調査する。
- (4) 以上(2)(3)の作業とは別に、広範囲にわたって簡単なアンケートを実施し、エスペラント使用者の「言語カルテ」を集成し、言語的現実について全体像を得る。
- (5) インフォーマントに対する面接・テスト・賛否の票決依頼などの方法により、「充実」の進行状況を把握・測定する。
- (6) 上述の各段階で得られた指標値と(5)の測定結果とを勘案して、「動態論」的研究のための「モデル」を設定する。

要するに、言語としてのエスペラントの「動態」の様相を日々に追求し、またエスペラント世界の「言語地図」を作成して、新旧の情報を絶えず入れ換えて、「発展」の動向を展望しようとするのである。

「権威」は不要

「動態論」は、言語を「流動の相」において見る。それは単なる「変化」ではなく、一定の方向性を有する「発展」の過程なのだ。その動因は「情報伝達のより高度な効率」への志向であり、「冗語法」に関する「均衡の原則」「経済の原則」などがその根底に働いている。具体的には、「誤用」や「(新語・新語法の導入による)改新 innovations」などの「充実」が、実際の言語運用の中で「調整 réactualisation」されて、新しい共時状態へと移行していくのである。言語体系や言語単位は、もともと言語学者が研究目的に合わせて設定したものであり、「体系」や「単位」より以前に「冗語法」が存在するというジャコモの主張は、注目に値すると思う。

さて、以上のように「言語の発展」を理解する場合、言語学者や(アカデミーなどの)言語機関はこれにどう対応するべきなのであろうか。ジャコモは、「言語問題への『権威』の介入は有害無益だ」と言う。言語はもともと「規範」をもって律するべきものではない。交流がいちじるしく阻害されるのでなければ、原則として「自然態」にゆだねたほうがよいという考えである。一部の「有識者」が一般大衆を規制し指導するような「階層的交流」は望ましくない。学者の役割は、言語の実態と動向を把握し、いちいちの「充実」現象がそれに則しているか否かの見解を述べるに尽きる。ただし、それは「命令」や「押しつけ」ではなく、せいぜい「助言」や「勧告」ととどまるべきだと言うのだ。

民族言語と異なり、エスペラントにはいわゆる「ネイティブ・スピーカー」がない。また、フランスの「言語アカデミー」や日本の「国語審議会」のような公的性格をもつ機関も存在しない。(「エスペラント・アカデミー」には、言語問題について統一的規範を遵守させるほどの「権力」はない。)唯一の依るべき基準は、創始者ザメンホフが定めた基本文法16か条と基本語彙を含む「エスペラントの基礎 Fundamento de Esperanto」である。これさえも「金科玉条ではない」と、ジャコモは言う。しかし、民族言語のように基礎となる母

語集団や伝統文化をもたない人工計画言語エスペラントの場合、最小限の人為的「規範」が、絶対に必要である。それがなければ、エスペラントは支柱を失って「分裂」し、「国際共通語」としての機能を失ってしまうであろう。

エスペラントは、世界各地に散在する多数の使用人口を擁する言語社会を形成している。「国際化」の進展とともに国際交流に最適の言語手段として、北米やヨーロッパ以外のアジア・アフリカ各地域への一層の普及が予想される。その際、「発展」の動因である「充実」として、非西欧語的要素がますます出現するようになるであろう。従来「西欧中心的」であったエスペラント界の権威が、「権力」をもってこれを抑制することはもはやできない。ジャコモの「言語発展」説は、ひとつの言語理論としてだけでなく、エスペラントの将来進むべき途を示唆するものとして、評価することができる。

(1992. 01. 07 稿)